

開田面積二九万坪まで掘げ、ライスセンターの設置を目標としている。

このほか、高森町における高冷地を葉の計画栽培も軌道にのりつつあり、阿蘇農業はきめこまかな開発が進められ、米を基幹作物としながら、畜産など需要度の高い作目を重点として大きく脱皮しようとしている。

畜産

開発のホープとして従来から天与の原野を利用した牧畜が盛んで、戦前は股踏強じんな軍馬の産地としてきこえ、戦後は和牛の主産地として生まれかわり、さらに昭和三十年には阿蘇山麓集約酪農地として三十四年には久住飯田集約酪農地として国の指定を受け、特に小国郷には、はるばる濠州から一、〇〇〇頭のジャージー種乳牛（原産イギリスジャージー島・鹿毛）が導入され、また、昭和三十六年には肉用牛として理想的タイプのアバーデン・アンガス（原産イギリス・黒毛）が大量に導入されるなど畜産開発に活発な動きをみせてきた。

近年、食糧需要の変化によって、畜産物の需要は急増する傾向にあり四万五、〇〇〇頭の原野をもつ阿蘇は、県下は勿論、北海道と並んで、わが国での畜産拡大の適地として関心を集めるようになってきた。

全国初の国営による阿蘇大規模草地改良事業は、広大な阿蘇の草資源を開発し畜産王国建設を目標に、現在、草原はブ

ルドーザー、トラクターなどの機械によって、新しい牧場に生まれかわっている。

総事業費約一七億円を投じて、北外輪の阿蘇町・一の宮町・産山村一帯の一、七〇〇ヘクタールに及ぶ牧野を改良して、高原阿蘇に適したオーチャードグラス、ケンタッキーなどの牧草を栽培し、これに乳牛一、八〇〇頭を導入、肉牛を年間二、七〇〇頭出荷する計画で、九州の畜産開発の拠点にしようとして大きく歩を進めている。

林業

戦時中の濫伐と、二十年の大水害によって、多くの森林資源をなくしたが、原野造林も進み、山東部の波野・産山・小国を中心とした拡大造林面積は約一五、〇〇〇ヘクタールに及び、現在の林野面積は約八万ヘクタールに及んでいる。これは県の総林野面積四七万ヘクタールの約二割に当る。経営主体別では民有林（公有林を含む）がその九四％を占め、残り六％が国有林の構成となっている。林種別では針葉樹が大宗を占めながらも全体の九二％は杉造林で占められている。

小国の林業は全国にその名を馳せ、恵まれた自然条件と品種の使い分けが好成績をあげ、「ねばり」と「つや」の良さは高く評価され、小径木需要の傾向もあって、伐期三十年で出荷され阿蘇林業は活況を呈している。

阿蘇林業については、既成林業地帯の



第四の火をめざして

△阿蘇郡小国町岳湯▽

小国町からバスで五〇分。県境阿蘇山に抱かれたような岳湯の部落につく。湖蓋山をとりまいて岳湯をはじめ岳湯、新湯、大分間の大湯、筋湯と活発に噴気を続ける温泉群がある。

この天賦の噴出蒸気に注目し、発電に利用しようと、県が地熱開発に着手したのは、昭和二十六年であった。通産省地質調査所に依頼して地熱調査を行なった結果、第一候補にあげられたのが、この岳湯地区であったのである。

早朝の岳湯部落は、まるで部落全体が白い湯気に包まれてしまったようだ。各戸に炊事用とこたつ用に熱気を引いているし、北里小学校岳湯分校はスチーム付である。阿蘇の奥深く、寒さ知らずの別

鉄道建設公団の手によって宮崎県側日ノ影町附近（約二・七キロ）ならびに天狗山附近（約二・四キロ）の路盤、橋梁、ずい道工事が進められている。開通については、今後の年間工事費の都合にかかっているが（日ノ影・高千穂間一・五キロは四十五年度中に完成予定）、沿線一帯の地下資源をはじめ森林資源及び観光資源開発に大きく役立つ日も近い。

また、既設宮原線小国駅から菊池市限府に至る「小国線」については、三十二年七月調査線から工事線に昇格し、その後毎年測量設計等の調査も進められ、本年度は小国・中津江間の測量設計と用地買収にかかっている。

昭和三十五年、八幡製鉄の手で行なわれた二本のテストボーリングでは、それぞれ二五〇メートルで二〇〇度の自噴蒸気を得た。四〇年から県がこれを引き継ぎ、通産省と協同調査の形で、今後五カ年計画でさらに細かな調査が進められようとしている。一〇〇メートル、一、〇〇〇メートルのボーリングによって電気検層、温度検層などの調査が行なわれる予定である。

湖蓋山の裏側、大分県大嶽では、明年まず一万瓩の発電を開始する予定だが、このほかには岩手県にあるだけで、全国でも珍らしい。原子力発電が第三の灯なら、地熱発電は阿蘇の四発に新しい灯をとす第四の灯ともいえる。

あふれるフロンティア精神

△県立阿蘇農業高校▽

本館の前庭に、二つの碑がある。第二代校長であり、阿蘇の農業に大革命をもたらした百瀬兼千助先生の胸像と、皇太子、皇太子妃からお言葉をいただき、緑のリボン章に輝く愛の献血を記念した碑とがある。

地域農業の先駆者となるべき農民魂を植えつけた近代農業の担い手となすべき、心身ともに健康な産業者を育てようという、県立阿蘇農業高校の二つのバックボーンが象徴されているようだ。

阿蘇農大入学を目指す大半が、地元で、そして自立農業を志す若者たちという。昭和三十八年、文部省のバイロットスクールに指定さ

経営林道の開き・維持補修、造林々道の整備、施設の近代化・経営の合理化などをはかる一方、土地利用については、畜産あるいは観光と競合することなく相互補完しながら、多角的多面的活用による開発に努める必要がある。

このような趣旨にそって、林業構造改善事業が小国町で四十年から、南小国村が四十一年度から、それぞれ九、三〇〇万円、八、一〇〇万円の事業費を組んで事業実施にはいっている。

また、かねてから山村住民の宿願であった山村振興法も遂に四十年五月誕生し早速阿蘇郡では小国町が四十年度に振興山村の指定を受け、本年度から他の関連事業の進行と歩をあわせながら、明るい山村建設にふみ出した。総額一〇億五、

れた。その一環として、一五〇頭の牧野改良にとり組み、ジャージー、ホルスタイン、アンガス、肥育褐牛を導入して、明日の畜産阿蘇の先駆者となるよう意気込んでいる。

六〇年という実績を誇る学校林および演習林のなかに新築された管理舎も自慢のひとつ。管理舎は、五〇人が宿泊実習できる特別教室なのである。

清澄な高原の恵まれた教育環境のなかで、生徒たちは、どこまでものびやかで明るい。県下のトップを切って献血を決定し、以来積極的に献血を続けている生徒会、伝統的馬術クラブを始めとする各クラブの活発な活動もなすける。伝統と環境と近代的施設に恵まれて、明日の郷土農業のリーダーたちがたくましく果立って行く。

〇〇〇万円にのぼる事業費（概算）を計上して、土地改良及び農道・林道・牧道等の整備を中心とした生産基盤の整備、ならびに農畜産経営及び林業経営の近代化と生活環境の整備を二本の柱とする内容の振興計画を策定し、四十一年度から四カ年を実施年度としてスタートした。南小国村でも同様振興山村の指定を受け、四十二年度から事業実施に入る段階にあり、他の振興施策との積み重ねにより、一層の効果が期待されている。

鉄道交通網の整備

経済基盤の強化をはかる鉄道新線建設は、高森線高森駅と日ノ影線日ノ影駅を結ぶ「高千穂線」四三キロに及ぶ建設工事が、総工費約九〇億円を見込んで四十年二月に起工し、現在、

観光開発と道路網の整備

このように、阿蘇には法律に基づく各種の地域指定が行なわれているほか、県計画にも開発の基本構想をかかげ、県独自の開発をすすめることにしている。

畜産と並んで阿蘇開発のホープと目されている観光産業については、昭和三十三年十月に、三年八カ月の歳月をかけ、延べ五八万人の労働者、二〇億円の巨費を投じて有料道路「別府阿蘇道路」が完成し、大分県湯布院町水分峠から阿蘇郡一の宮町城山に至る延長五・二キロの道路開通によって、別府・阿蘇・熊本・三角・雲仙・長崎を結ぶ総延長三〇〇キロに及ぶ「九州横断道路」は、国際的スケールの観光ルートとしてますます内外の注目を浴びるようになった。

すでに三十二年十月、同じく道路公団の手によって開通をみていた阿蘇中岳火口に至る阿蘇登山道路、その後、県営有料道路として四十年一月供用開始した阿蘇山観光道路など、阿蘇山周辺（奥阿蘇を除く）の道路網の整備によって、観光客も急増の一途をたどっている。

この増加傾向は、天草五橋開通後の驚異的自動車交通量（開通後一カ月間二二万台・一日平均七、三三一台）を考慮すると、阿蘇、天草という二大観光地の関連によって、さらに拍車がかけられるものと思われる。

単位：千人・%

地 域	昭 40			昭39
	計	県外客	県内客	
県 計	11,093 (100)	6,290 (100)	4,803 (100)	9,704 (100)
うち阿蘇国立公園	3,682 (33)	2,283 (36)	1,399 (29)	2,923 (30)
うち阿蘇国立公園	360 (3)	234 (4)	126 (3)	377 (4)

単位：千人

地 域	昭31	38	39	40
	県 計	5,042	8,548	9,705
うち阿蘇国立公園	1,290	2,201	2,923	3,682
うち阿蘇国立公園	262	356	377	360

注：観光統計による。

（注）やまなみハイウェイの交通量は、開通後一カ月間八万六、〇〇〇台・一日平均二、八〇〇台で昭三十九・十・昭四十一・八の総通過量二二〇万八、〇〇〇台・一日平均一、七〇〇台。

阿蘇総合開発の指標

つぎに、阿蘇の経済的地位を所得面からみると、三十五年の阿蘇郡における生産所得総額は、九一億六、八〇〇万円これは県内生産所得の五・七％に当る。これを経済集約度でみると、まず人口一人当たり所得生産力では、県民一人当たり生産所得と比較して九三・六％（八万二、二〇〇円）で、県平均を僅かに下回る生

よこが お